

## シカゴ万博における千總

千總文化研究所 小田桃子

### 1. 12代当主・西村總左衛門の役割と活動

- ・12代西村總左衛門（1855～1935）：千總当主。刺繍・染物などの染織品を扱う事業家。旧姓三国直篤。儒学者・三国幽眠の三男。明治5年（1872）に西村家に養子入り。
- ・当時の千總：複数の博覧会への出品（5回の万国博覧会と3回の内国勸業博覧会に出品・受賞）、国内外への販路拡大（店内を内国方・外国方に分離・明治宮殿等宮内省の御用伺い）京都美術工芸発展への関わり（京都美術協会の創設と運営・外国要人の視察先のひとつ）
- ・渡航総代として、明治26年（1893）3月6日離京～明治27年（1894）2月17日帰朝  
丹羽圭介（1856～1941、陶器等の美術工芸家）、直木栄助（縮緬商、京都商業会議所会員）と務める。
- ・補助金：3000円／人、業務：出品物の荷解き・荷造、物品の予約販売・残品取り扱い・出品物の説明に関する事務・商工業の視察調査
- ・私事の出来事：渡米前の母の死。養子縁組と、緑綬褒章の受賞。

### 2. 報道された「千總」の出品物

『官報』（3232号、3234号、3235号、3237号）掲載の受賞内容

- ① 〈近江八景図天鵝絨友禪壁掛〉・・・[資料1]（ア）※農商務省買上げ品
- ② 〈京都東山ノ図刺繍屏風〉③ 〈芦鴨図天鵝絨友禪衝立〉・・・[資料1]（イ）
- ④ 〈松孔雀図刺繍壁掛〔表京都林泉ノ図刺繍 裏四季草花天鵝絨友禪屏風〕〉・・・[資料1]（ウ）
- ⑤ 〈保津川ノ景刺繍扁額〉

久保田米僊『閣竜世界博覧会美術品画譜』第2集（大倉書店、明治26年11月23日）掲載の出品物

- ⑥ 刺繍対聯〈黒緇子糸縫〉

『京都美術協会雑誌』7号（京都美術協会、明治25年12月28日）掲載のうち、上記以外の出品物

- ⑦ 壁張刺繍緇子地山水花鳥図 ※農商務省買上げ品

その他の関連記述で、出品した可能性のある製品

- ⑧ 杉樹と小禽の図の大掛額、⑨ 岩石瀑布図の横額・・・[資料1]（イ）

#### [資料1]

『日出新聞』に掲載された出品解説

※【丸数字】は筆者が追加 ■は汚損のため解読不可

（ア）八景の天鵝絨友禪 日出新聞 明治25年12月16日二面

西村総左衛門氏が世界博覧会出品のため農商務省の注文によりて織染したる【①】天鵝絨の壁張用は幅九尺竪七尺八寸にて狩野派の畫風に近江八景の圖を友禪にて染成したり然れども友禪の彩色を用ゐるにあらず濃淡の墨色のみにて夜色の沈々たるを描き去たる高尚の作意先づ稱すべし主眼には石山の山門舞臺を顯はし右へ瀨田矢走左りへ粟津三井辛崎堅田と漸次に遠くし比良の白皚々を以て中段遮ぎり上邊淡暗斷續の雲間に一輪の孤月を出し湖水の廣き沖の島多度島竹生島の點綴を以て滿幅の位置を整のふ其畫中樓閣人物孤舟等は二重の天鵝絨縫を以て之を補ふ疎に似て疎ならず經營の苦辛思ふべく蓋し是迄に觀る事なき此種の大作なり

(イ) 西村<sup>ちきう</sup>総<sup>う</sup>の出品物 日出新聞 明治 26 年 1 月 12 日 (木) 一面

西村総左衛門氏が米國博覽會へ自己の出品は七八品あり其一二を擧れば【②】書院飾大屏風(長サ一丈六尺曲幅二丈四尺)東山春曙の圖にて岸竹堂氏の下繪になり大体は祇園枝垂櫻を描き花間より東山諸樓大谷知恩院等を望む景色なるが地は縹子の縫漬しにて花木ともに眞に迫れる中にも東方稍あけなんとする空相の色系には殊に心を尽す處ありて妙を稱する外なく腰は(二尺)天鵝絨友禪に鴨川の圖亂杭蛇籠の間に小芦と河原撫子を植へ數十の上り鮎二三の蜻蛉の飛かふ様子上下相適して意匠伎倆よく調のひたり裏は嵐山の風色芹川邊より嵐峽を望めるを森春岳氏、描き表裏東西相映するの趣向中縁は古代模様の縹珍総縁は臘色塗純銀櫻楓透し彫の金具にて容易に動かし難き重量なれば地摺に鐵の小車を添たり三年を経て初めて成工せし由稀有の神器といふべきなり 尚是と同じ丈尺のものを今一つ製造中のよし。【③】大衝立(長け八尺幅一丈五寸)は天鵝絨友禪にて池邊鴈鴨の圖の下繪は藤井玉洲氏が描きて品位よく調のへたり椽は臘色に梨子地の面取りとし純銀にて天は雲地は浪の金■(かなもの)■■■裏は絹地へ竹枝飛雀の圖を玉洲氏が描■■(きた)り。【⑦】大掛額(長七尺五寸幅一丈一尺)黒縹子地に杉樹の梢上を數十の渡り鳥を縫たり小鳥の羽翼杉葉の色相頗る妙を究めたり。【⑧】横額(長三尺幅一丈一尺)浅黄縹子の縫つぶしにて岩石瀑布の圖なるが流泉激流の勢ひよく巖石の突兀たる状布置よろしく上端を蔽う流霞は金糸にて微塵縫にせるが其工の幾何なりしぞ例ながら商機にぬかりなき西村氏の苦辛は米國に赴きていかなる稱賛を齎らし歸るや

(ウ) 美人を送る(米國へ) 日出新聞 明治 26 年 2 月 26 日(日) 二面

京都西村総左衛門氏が米國出品最後の一物は昨日此地を發したり是は先日送りとる【④】祇園枝垂櫻と同寸法にて長け一丈一曲四尺之を引延せば四間の大屏風にて表は縹子の縫結にて京都林泉名所圖なり其名所は清水成就院櫻花の曙景。洛西等持院首夏の微雨。嵯峨天龍寺新樹の翠色。宇治平等院蓮池の月影。洛北銀閣寺紅楓の夕照。北山金閣寺雪中の群鴉なるが其刺繡の實境を寫して緻密なる恰かも洋畫の如く濃淡照映遠近判明例の特技に成る事なれば今さら稱せんも管なるが今度は畫中に人物を容れ大は五寸小は一二寸其面貌と手足は旭玉山氏の象牙に彫たるを箔め之を直ちに縫込みたる伎倆には又一驚を喫はせられたり下部は浪模様に貝尽し裏は天鵝絨友仙にて四季の艸花に群蝶飛翔の圖其下部は黄塗の眞竹を網代に組みて檜垣に代用せしめたるは新意匠なり烏銅透し彫の縁金物等にて此美人何程の價值となりて米國へ停まるや冬をも待たで報道を得るならん

## [資料 2]

### 渡米の影響に関する記述

(エ) 〈縹子刺繡草花模様窓掛〉(藤井玉洲下繪)、評価:「草花は芍薬にして其四縁は黒地に百蝶の刺繡なり総体の地は蒲色の如くにして 同家の主人裏に米國へ渡航し室内裝飾を見て感ずる處あり更に意匠を練りて彩色の配合を製したるものゝ由其應用の如きは需める人ありて初めて其是を知らんのみ」

「第三部陳列會」『京都美術協會雜誌』30号(京都美術協會, 明治 27 年 11 月 28 日)より一部抜粋

(オ) 万邦美術ノ競争場裡ニ立チテ親シク優勝劣敗ノ狀況ヲ觀察シ専ラ繡織、采染、ニ関スル意匠考案ノ研究ヲ為シ大ニ奮激スル所アリ 帰朝後泰西文物ニ感触セル理想ニ憑リテ種々ノ改良ヲ為シ頓ニ製品ヲ進化セシメ一両日ヲ開導セリ

「京都美術沿革史」『京都美術協會雜誌』140号(京都美術協會, 明治 37 年 3 月 30 日)より一部抜粋